

[書評論文]

## 久保進『言語行為と調整理論』

東京：ひつじ書房, 2014. pp. xix + 471. ISBN4-89476-657-0

山岡政紀

創価大学

### 1. 言語行為理論の拡張と調整理論

本書は、著者久保進が2012年に関西外国語大学より博士（言語文化）の学位を授与された同名の博士論文に加筆修正を施して刊行したものである。久保はこれまでオースティン、サール、バンダーベークンと続く言語行為理論（speech act theory）<sup>1</sup>を、解説や翻訳などを通じて日本に紹介するとともに、十年来、前三者の理論を踏まえつつ独自の観点から調整行為という新たな概念を提唱している。本書はそれをまとめ、調整理論という一つの体系として完成させたもので、久保における集大成の書である。

前三者の展開を振り返ってみると、Austin (1962) の発語内行為（illocutionary act）が、遂行節を含む遂行文に対して認定される限定的なものであったのに対し、Searle (1969)、同 (1979) では考察対象を、遂行節を持たない一般的な文に拡張し、適切性条件（felicity conditions）を充たせば発語内効力（illocutionary force）を持つとして発語内行為の一般化を図った。さらに間接的言語行為（indirect speech act）を理論化したことで、言語行為理論を言語哲学領域から言語学・語用論の普遍理論へと展開した。そして Vervaeke (1994) では、複数の話者が高次の発語内目的を共有しつつ一定の発話連鎖を形成する上位単位を介話（intervention）と呼んで規定し、言語行為理論を複数話者によ

---

<sup>1</sup> 久保は諸著書・訳書・論考においてしばしば訳語の変更を行っている。本書の書名中の「言語行為」も“speech act”の訳語であるが、Vervaeke (1990)、Vervaeke (1994) の書名中の“speech act”に対するそれぞれの訳書（久保監訳（1997）、久保訳注（1995））の書名では「発話行為」を用いている。久保（2001）以降はこれを「言語行為」に改め、本書に到っている。他の語においても著書の刊行年における訳語の異同がある。他の研究者の用語法との不一致も少なくない。本評においては当然ながら久保の最新の用語法が使用されている本書中の訳語を使用する。訳語の適否や優劣などについてはここでは論じない。

る会話理論へと発展させた。<sup>2</sup>

このように言語行為理論の歴史は、どの段階においても理論の質的転換が結果として考察対象の量的拡張をもたらし、より一般的で普遍的な理論を志向しつつ進展してきたと言える。本書が標榜する調整理論もまた、バンダーペーケンの会話理論を基盤としてはいるが、さらに複数話者間における心的状態の調整行為を射程に入れることを試みている。それによって、情報伝達目的の会話だけでなく、一見無目的のように見える交感的言語使用の会話にまで考察対象を拡張しようとしているのである。その意味で、本書の枠組みの説明力と合理性がどのように評価されるかが今後の言語行為理論のあり方を方向付けることになるものであり、注目すべき重要な一書と言える。

## 2. 本書の構成と概要

本書の構成として各章の題名に章ごとの節名を添えて以下に記す。各節の下にある小節は紙数の関係で省略する。

### 第1章 序論 言語行為

1. はじめに
2. オースティンの言語行為論
3. サールの理論とその発展系
4. 非字義的発語内行為
5. 会話の理論
6. 本章のまとめ

### 第2章 調整と調整行為

1. はじめに
2. 調整
3. 調整行為
4. 交感的言語行為と調整
5. 本章のまとめ

### 第3章 合致と調整の方向

1. はじめに
2. 発話対
3. 合致の方向の理論
4. 合致と調整の関係
5. 対人調整
6. 一般化された会話の公準と間接的調整方向
7. この章のまとめ

### 第4章 会話の成功条件と充足条件と調整

1. はじめに
2. 会話の成功条件
3. 会話における発話の充足条件
4. 会話が充足されるための最小条件
5. 本章のまとめ

### 第5章 志向性と調整

1. はじめに
2. 志向性
3. 志向性の前景化と背景化
4. 共有志向性と We のパラダイム
5. (T) HERE X GO のパラダイム
6. 本章のまとめ

<sup>2</sup> Searle and Vanderveken (1985) は、サールからバンダーペーケンへの橋渡しの役割を果たしている。ここでは適切性条件を成功条件 (success conditions) と言い換え、新たに充足条件 (satisfaction conditions) を追加している。これは発語内目的が最終的に達成されるまでの条件を規定したもので、指令に対する服従、提案に対する受容など、相手の行為によって充足するものをも含んでいる。この点も複数の話者によって成立する会話の理論へと移行していったことの一つの表れである。

## 第6章 「世間」という会話の背景における調整行為「遠慮」

1. はじめに
2. 「世間」という枠の中の人間関係
3. 作業仮説
4. 達成の様式〔人間関係〕の検証
5. 本章のまとめ

## 第7章 まとめと展望

1. まとめ
2. 展望

久保が調整行為について考察・言及した諸論考は、久保(2002)をはじめ十編以上に及ぶが、そのアイデアは各節の中に活かされているものの、そのまま採録した章・節はない。本書全体が「調整理論」の体系的確立を意図した合理的な構成のもとに書き下ろされている。

まず第1章では序論として言語行為理論の系譜をたどりながら、会話理論へと発展したバンダーベークンの構想を補完する形で調整理論を提唱しようとしていることが述べられている。その位置づけについては1.で概説したとおりである。

第2章では、調整理論の根幹を成す調整の概念や調整行為の定義を提示している。もともと発達心理学の概念であった調整の概念を応用することによって、従前の言語行為理論が対象としていなかった交感的言語使用を会話の理論に取り込むことが可能になったことが説得的に示されている。

第3章では、複数の話者間で行われる調整行為を分析する具体的な枠組みとして、発話対という会話の単位を設定し、先行発話の話者と後続発話の話者との間で心と心の調整を行う際の動的な構造を、合致の方向を応用したモデルを用いて説明している。

第4章では、会話の成功条件と充足条件は、会話を成立させるための慣習的な様式であるとする立場から、その条件群の詳細な記述を通して発語内行為と調整行為の内在的制約、外在的制約について考察している。

第5章では、サールの共有志向性(shared intentionality)の概念を調整理論に応用する。英語では人称表現の代用によって会話参与者に対する志向性を背景化したり前景化したりすることがしばしば行われるが、そのことが調整行為にどのように活かされているのかを考察している。

第6章では、会話の背景に対する社会言語学的な分析を行っている。日本語の言語文化に特有の「遠慮」という調整行為に注目し、その文化的背景にある基底感情を和辻哲郎の「世間」の概念を援用して規定する。その結果、ヨコの人間関係に対するわきまが日本語話者の「遠慮」の動機づけになっていると論じている。

以上のように各章は独立しているが、調整理論の説明力を示すために関連諸分野の概念を積極的に援用した、多角的で重厚な体系が構築されている。3.以降では、第1章、第2章の内容を中心に本書の理論の特質を考察することにする。

### 3. 会話理論としての調整理論と調整行為

調整行為とは、不安定な心の状態（＝心的不均衡状態）を脱却し、安定した心の状態（＝心的均衡状態）を取り戻そうとする言語行為である。<sup>3</sup> 久保はこの調整行為を、発話行為、命題行為、<sup>4</sup> 発語内行為、発語媒介行為に加えて、一つの発話において同時に遂行されることの第5の言語行為と位置づけている。

調整とは、希望・夢・願望・期待などが満たされないことによって生じる心的不均衡状態を脱却し、心的均衡状態を取り戻そうとする取り組みであり、発達心理学における Piaget (1946) の調整 (regulation)（＝幼児が心的不均衡状態を脱却しようとして行う取り組み）の概念を援用したものである。そして、言語行為による調整を調整行為と呼び、本書ではさらにこの調整を、自己調整 (self-regulation) と対人調整 (interpersonal regulation) とに分けて分析している。

調整行為と他の言語行為との関係については、次のように定義している (p. 91、下線は原著のまま)。

#### (1) 調整行為と発語内行為や発語媒介行為との関係

話者は1つの発語内行為を遂行する際に (in performing)、1つの調整行為を遂行し、その発語内行為とともにその調整行為を遂行することによって (by performing)、1つまたは複数の発語媒介行為を遂行する。

この定義が意味することは、第一に調整行為が発語内行為を補完する位置にあること、第二に（第一からの必然的帰結だが）発語内行為と同様に調整行為もまた発語媒介効果の主因となるということである。

(1) が意味する二つの事柄は、調整行為と発語内行為の近似性を示唆している。それではなぜ調整行為を発語内行為と区別して第5の言語行為としたのであろうか。言明型 (assertives)、行為拘束型 (commissives)、行為指示型 (directives)、宣言型 (declarations)、感情表現型 (expressives) に続く、発語内行為の第6のタイプ・調整型 (reguratives) とでも位置づけるわけには行かなかったのか。この点の確認は非常に重要である。久保があくまでも発語内行為と調整行為を別の行為として範疇化している最大理由は、発語内行為は単独の発話に対しても認定可能な概念であるのに対し、調整行為は発話を越えた発話対 (utterance pair) や介話 (intervention) といった上位の単位において話者間の心的状態の調整においてなされるものである、という点にある。

<sup>3</sup> はじめに (V) より。

<sup>4</sup> Searle (1969) では、Austin (1962) の発語行為 (locutionary act) に異議を唱え、発話行為 (utterance act) と命題行為 (propositional act) に換えている。本書 3.2 に詳しい。

具体的事例として、用例（2）の夫婦の会話を用いて、（1）を検証したい。<sup>5</sup> ここでは妻の先行発話と夫の後続発話とがある。

（2）デパートの宝石売場にて

妻「ねえあなた、すてきな宝石！ 今度こそ結婚記念日のお祝いに欲しいわ」

夫「まあまあ、待ってくれ。今度のボーナスが出たら買ってあげるから」

この例では先行発話の話者（＝妻＝後続発話の聴者）と後続発話の話者（＝夫＝先行発話の聴者）の双方が心的不均衡状態に陥っている。先行発話で妻が甘えた声でねだるのも夫に愛情を求める調整行為であり、後続発話で夫が妻をなだめるのも妻に愛情を伝える調整行為である。妻は自分の欲求が満たされない心的不均衡状態に対する自己調整と夫にねだることで自身の心的不均衡の解消を図る対人調整とを先行発話で言語化しており、夫もまた、そうした妻の欲求をすぐに満たしてやれない自身のもどかしさという心的不均衡状態に対する自己調整と、自身の愛情を妻に伝えることで妻をなだめ、その心的不均衡状態を緩和しようとする対人調整とを同時に遂行しているということになる。

ここで、妻の先行発話は「依頼」の発語内行為を遂行すると同時に、夫への愛情要求という調整行為を遂行している。夫の後続発話は、「約束」の発語内行為を遂行すると同時に、妻への愛情伝達という調整行為を遂行している。その結果、約束という発語内行為も妻を喜ばせ、愛情伝達という調整行為もまた妻を喜ばせる。（1）に言うところの、発語内行為と調整行為の同時遂行とはこのことである。

妻の先行発話がごく一時的とは言え夫を困らせたのは、依頼の発語内行為と愛情要求の調整行為の双方からもたらされた発語媒介効果であり、夫の後続発話が結果として妻を喜ばせたのは、約束の発語内行為と愛情伝達の調整行為の双方からもたらされた発語媒介効果である。（1）に言うところの、調整行為が発語内行為と同様に発語媒介効果の主因となり得るというのはこのことである。

（1）を検証した用例（2）の枠組みは、既に調整行為が発語内行為とは異なる観点から範疇化されているものであることが示されている。

単独の発話を考察対象としたサール以前の言語行為理論では、一人の話者と、話者が相手として意図する聴者とが固定的に存在していたが、この理論で扱われるのは話者と聴者ではなく、二人の話者（先行発話の話者と後続発話の話者）である。もちろん互いに相手の発話時には聴者となっているが、大事なことは両者に対等で相対的な地位を与えることである。本書では Schegloff and Sacs (1973) などの会話分析で示された隣接対

<sup>5</sup> （2）は本書からの引用ではなく、評者による作例である。本書では調整理論の基盤となる概念が各小節で分散的に説明されており、本評ではこれを要約して説明するために、p. 91 や pp. 180-181 などに示されている事例を総合して作成した。

(adjacency pair) の概念を参考に、新たに発話対 (utterance pair) という会話の構成単位を提案している。(2) の夫妻の会話は発話対を成している。その内部構造の緊密性を示すのが調整行為であるという点において、単独発話における発語内行為とは異なる概念として、会話の理論における調整行為が提唱された必然性がある。

発語内行為に成功条件と充足条件があるのと同様、調整行為においても、自己調整行為と対人調整行為のそれぞれに成功条件と充足条件がある。そのうちの自己調整行為の成功条件の一般形式は次のように記述されている (p. 92)。

### (3) 自己調整行為の成功条件の一般形式

- ① 調整者が、自身の心の均衡状態を回復・維持することを意図している〔調整の目的〕
- ② 調整者は、調整を行う立場にある者として行為を遂行する〔達成の様式〕
- ③ (i) 調整者は、自身に関わる現状を把握して〔予備条件〕  
(ii) 現状に対する自身の心的状態を把握している〔予備条件〕
- ④ 調整内容は、調整者にとって対応できる範囲のものである〔調整内容〕
- ⑤ 調整に際して、調整者は、自身の発話時の気持ちに対して偽りはない〔誠実条件〕

これに関する用例 (4) も見ておきたい (p. 93、話者名のあとの番号は評者による)。

### (4) お佐紀1: ... このところ老分さんはほんやりと時を過ごしておられましたよ。

お佐紀が冗談を言い、笑った。

由蔵1: お内儀様にそう心底を見抜かれているとなると、この由蔵、そろそろご奉公を辞する時が来たのかもしれないな。

由蔵は、真剣に答えたが、すぐに晴れ晴れとしたもの変わった。

由蔵2: こうして佐々木様が江戸にお戻りになり、おこんさんと一緒に顔を見せられた。そう簡単に引っ込むわけには参りませぬな。

お佐紀2: なんだか老分さんは、自分のお気持ちと独り相撲をとっておいでのようね。

由蔵3: お内儀様。こちらはお蔭さまで跡継ぎの一太郎様が授かりました。

次はい、尚武館の十一代目の後継誕生でございますよ。この由蔵、しっかりと見届けるまで、米沢町の角で睨みを利かせて頑張ります。

由蔵が自らを鼓舞するように言った。

(佐伯泰英『石榴ノ蠅』)

由蔵1では気持ちの張りを失った心的不均衡状態により引退を示唆するが、すぐに思い直して由蔵2では引退を取り消している。この二度の発話で由蔵は自身の進退に関する意志表明を発語内行為として遂行しつつ、自己調整の調整行為を遂行している。

ここでの自己調整は上掲の成功条件を充たしている。すなわち由蔵は、①自身の老いに気づいて進退を迷う自身の心の不均衡状態を回復することを意図し〔調整の目的〕、②調整行為を行う立場にある当事者としてこの発話を遂行している〔達成の様式〕。また、③(i) 自身の老いの現状と(ii) 自身の葛藤を把握している〔予備条件〕。④その葛藤は由蔵にとって対応できる範囲の心的状態であり〔調整内容〕、⑤調整に際しては、迷いを払拭したい発話時の自身の気持ちに偽りはない〔誠実条件〕。

そして、自己調整と対人調整とは常に表裏一体の関係にある。由蔵は決して一人で独話的に自己調整しているわけではなく、お佐紀1の指摘を受けて生じた自身の心的不均衡状態に対する調整であり、お佐紀に対する回答を示そうとする対人調整の過程と自己調整は同時に行われている。その自己調整の結果として、由蔵3では「やる気を見せる」発話を行い、これをもって対人調整としている。このように自己調整と対人調整との重層構造を記述することにより、話者間の合致や調整といった、従前の言語行為理論にはなかった動的な構造を捉えることを試みているのである。

#### 4. 交感的言語使用における心と心の合致

天気の話や健康状態を尋ねるなどの、自由で無目的な交感的言語使用 (phatic communion) について、バンダーベーケン会話目的を欠いているとして会話理論の分析対象から除外したのに対し、久保はそうした交感的言語使用は会話の重要な要素を担っており、発話内目的とは異なる「目的」を担っていると主張し、調整行為として会話理論に取り込むことができるとしている。

交感的言語使用は、人にとって避けることができない惜別、死別などの必然的事象をめぐる会話の中で頻繁に行われるものである。(5) は本書中の用例である (p. 114、話者名の加筆は評者による)。

(5) (登美)「あなた、もう会えませんね」

登美が名残惜しげに言う。

(乙女)「そうですね、会うことはないでしょうね」

(登美)「忘れませんよ、あなたのこと」

(乙女)「ええ、わたしも」

それで二人は別れた。

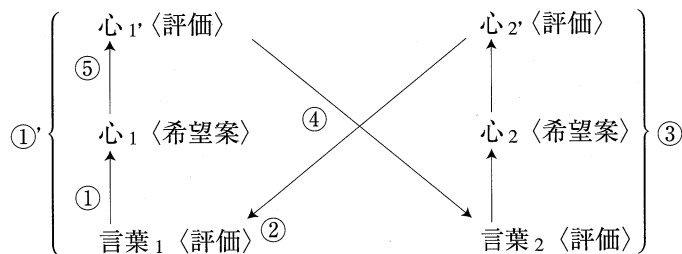
(和久田正明『夜桜乙女捕物帳夜の風花』)

江戸の女岡っ引き乙女と、乙女に助けられて江戸を去ることになった登美との、二度と逢うことのない別れの場面の会話である。ここでは二人は名残惜しさという心的不均衡状態を共有している。その状況での(5)の発話において、双方共に「事実確認」の発話内行為を遂行しているが、その情報の新規性は乏しく、むしろ受け入れがたい現実を受け入れ

ようとする自己調整と、その現実を随伴的に表明することでせめてもの心的均衡状態を保とうとする対人調整とによる調整行為こそが、この会話の主目的であると考えられる。つまり、発語内行為と調整行為とが同時に遂行されるとするこの理論において、発語内行為が主で調整行為が従であるとは限らず、(5)のように調整行為が主であるような発話もあり得るということである。本書ではこのような会話の用例が数多く示されており、そのことが調整理論の必然性をより強く主張するものとなっている。

久保は、バンダーペーケン以前の言語行為理論は言語の情報伝達機能を中心とした理論であって、このような交感的機能を正面から捉えた理論として調整理論の優位性を主張している。そのことの独自性を補完的に主張しているのが第3章「合致と調整の方向」である。Searle (1979) で発語内行為の分類基準の一つとして示された言葉と世界の合致の方向 (direction of fit) を、調整行為に即したものとするために大きな変更を加えているのである。具体的には3.「合致の方向の理論」で、言葉と世界に「心」を加えた3つの実在間の合致対応関係を考察すべき必要性が主張され、三角形を用いた「言葉と心と世界の合致のモデル」が示される。このモデルが説明力の高さを発揮する事例として、暗喩 (metaphor) の表現効果に関する考察が重点的に述べられている。

このように合致の方向の理論に「心」という要素を追加しただけでなく、さらに複数の話者間の心<sub>1</sub>と心<sub>2</sub>の合致を理論化した、より一層新規的なモデルが4.「合致と調整の関係」に示されている。会話参与者間の動的な歩み寄りによる心<sub>1</sub>と心<sub>2</sub>の合致のモデルを図式化したのが【図1】である (p. 178、図3-14)。



【図1】 妥協点を求める心と心の合致の方向のモデル

ここでは、先行話者がイメージする妥協点の希望案を言語化し、それを後続話者が評価しながら自身の希望案を言語化する。今度は先行話者がそれを評価しながら再度自身の希望案を言語化する。この過程を妥協点が得られるまで繰り返す、としている。

5.「対人調整」では、発話対の連鎖に内在する制約の1つに調整方向 (directions of regulation) があるとしている。これは合致の方向をより一般化したもので、発語内行為の準備条件における対人関係の上の権限 (命令や許可などに見られるもの) を記述するのにも説明力を持つものである。調整方向には、先行発話から後続発話への調整方向と、後続発話から先行発話への調整方向とがあり、先行話者と後続話者がそれぞれどちらを意図



するかによって、譲歩型、強要型、融合型、分離型と、4種の調整のタイプに分かれるとしており、調整行為の複雑な流れを記述する理論としての可能性を示している。久保は、複数の話者間の心<sub>1</sub>と心<sub>2</sub>の合致も、この調整方向の理論の一つの定式として示すことができる」と述べている。

ところで、従前の言語行為理論で言語の交感的機能が全く議論されてこなかったのかというそうではない。サールの発語内行為の分類には感情表現型 (expressives) があり、従来から、「謝罪」や「感謝表明」といった対人関係上の利害における不均衡の回復を目的とする発話がこれに分類されていた。激励の(6)「がんばってください」や見舞いの(7)「早くよくなってください」などの発話についても、行為指示型 (directives) の発語内行為と共通する表現形式を用いてはいるが、実際は自身の心情を相手に伝えることが唯一の発語内目的であるから、感情表現型の発語内行為と認定される。これらの発話の成立において行為の実行可能性や非自明性といった成功条件を要求しない点からも行為指示型とは認められない。

この種の発話は調整理論でも説明が可能である。例えば、難関の試験を直前に控えた友人の緊張や不安という心的不均衡状態を共有し、応援の心情を伝える(6)、病気で入院している状態の友人を心配しての(7)、いずれも調整行為と見ることができる。そうすると(2)や(4)とは違って重層的ではない唯一の目的を持つこれらの発話をどのように扱うのか。感情表現型の発語内行為と調整行為の関係性を何らかの形で再編する必要があるのではないだろうか。

## 5. おわりに

言語の情報伝達機能のみを捉えていた理論が、発話者の欲求や発話者間の対人的な交渉を射程に入れ始めるという展開の仕方は、ちょうど Leech (1983) がグライスの協調の原理を概説したあとに、それよりも強力に働くポライトネスの原理の存在を提示した展開をアナロジーとして想起させる。ただし、社会学を基盤とするポライトネスが、話者の欲求を抽象化・一般化したうえで、それをもとに対人接触の配慮を論じているのに対して、心理学を基盤とする調整行為は話者自身の内面の複雑な心的状態を抽象化せずに主観性をそのまま直観的に捉え、そのうえで調整行為という対人的行為として理論化しようとする点が異なっている。本書ではポライトネス理論と調整理論の関係性は詳しくは述べられていないが、ポライトネスもまた発話者間の心理的な歩み寄りであるから調整行為の一種として位置づけることが可能なはずである。逆に本書第6章で考察されている日本語固有の「遠慮」という調整行為はポライトネスでも説明が可能ではないか。両者の関係性について、今後の語用論学界のためにどこかで明確にしていきたいと願うところである。

本書の用例を見ても、日本の時代小説や英文の映画脚本などから、登場人物の心理的不

均衡状態がストレートに表現された用例が多く使用されている。そうした心理描写を抽象化することなくそのまま扱えるのは調整理論の利点であり、文芸評論の分析理論としても応用が可能なように思われる。そのうえで日常会話のような純然たる話し言葉に対してどの程度説明力があるのかも興味のあるところである。

以上、本書の概要を紹介しながら調整理論の特質などを考察してきたが、ともかくも紙幅の制約があるとは言え、本書の豊富な内容のごく一面にしか言及できなかったのは評者の力不足に依るものである。その点はどうかご寛恕願いたい。

### 参考文献

- 久保進. 2001. 「言語行為」 小泉保編『入門語用論研究——理論と応用——』5. 81-101. 東京：研究社.
- 久保進. 2002. 「調整行為標識としての定式表現 ‘if you don’t mind’」『英語青年』3月号、768-769、東京：研究社.
- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press. (邦訳：坂本百大訳 (1978)『言語と行為』大修館書店)
- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Piaget, J. 1946. “Piaget’s Theory.” In P. H. Mussen (ed.) *Carmichael’s Manual of Child Psychology* vol. 1 (3rd edition.), 703-732. New York: John Wiley & Sons, Inc.
- Schegloff and Sacs. 1973. “Opening Up Closings.” *Semiotica* 7 (4), 289-327.
- Searle, J. R. 1969. *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press (邦訳：坂本百大・土屋俊訳 (1986)『言語行為』勁草書房)
- Searle, J. R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Act*. Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳：山田友幸監訳 (2006)『表現と意味』誠信書房)
- Searle, J. R. and D. Vanderveken. 1985. *Foundations of Illocutionary Logic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vanderveken, D. 1990. *Meaning and Speech Acts Volume 1*. Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳：久保進監訳 (1997)『意味と発話行為』ひつじ書房)
- Vanderveken, D. 1994. *Principles of Speech Act Theory*. Montréal: Université du Québec à Montréal. (邦訳：久保進訳注 (1995)『発話行為理論の原理』松柏社)